

參考資料

我が国の博物館における障害者の芸術鑑賞機会の拡充のための取組等

視覚障害者の芸術鑑賞機会を拡充する観点からは、山梨県立美術館の「手で見るミレー」や静岡県立美術館のロダン彫刻の触察、千葉県立美術館の「触れる彫刻のコーナー」、川崎市立美術館の「タッチアートコーナー」など、触ることができる彫刻作品を用意している館がいくつかある。愛知県美術館でも、毎年所蔵作品による「視覚に障害のある方へのプログラム」を開催しており、絵画については図柄が盛り上がった立体コピーを補助的に使用している。美術館の場合、触ることによって作品にダメージが生じないかということが懸念されるが、例えば、兵庫県立近代美術館では1989年以降、毎年「美術の中のかたち―手で見る造形」展を開催し、2002年度以降兵庫県立美術館でも踏襲しているが、過去に作品がダメージを受けたのは人間の髪の毛を使った韓国の彫刻家シャ・ケナムの作品だけだったという。豊田市美術館では、1996年9月に開催された「ヴァチカン美術展：古代における人体表現」で、ヴァチカン美術館の許可を得て、視覚障害者が初めて海外の美術館所蔵の古代彫刻作品に触れることができた。

自然史系の博物館でも、例えば埼玉県立自然史博物館の視覚障害者コーナーでは標本等に触ることができ、和歌山県立自然博物館には「手で見る魚の国」の展示が、大阪府営箕面公園昆虫館には手を触れることのできるオオゴマダラの卵から成虫までのプレートの展示がある。また、神奈川県立生命の星・地球博物館では、1998年に我が国で初めて赤外線による音声歩行案内・解説装置「トーキングサイン・ガイドシステム」を開発・設置した。同館では2004年度に職員による「ユニバーサルデザイン検討ワーキンググループ」を発足させ、誘導用ブロック敷設箇所の再点検やガイダンス映像への文字情報の追加、展示解説書の作成等課題を整理し、整備を進めている。さらに、葛飾区郷土と天文の博物館のプラネタリウムでは、ろう学校向けに字幕つきの投映をしたり、盲学校向けに星空の状況の詳細な解説や体を使って天体の位置を把握するなどの学習投映も行っている。

また、宮崎県立西都原考古博物館では、オリジナルの「ジャケット型音声ガイド」と「触察ピクト」を導入した。「ジャケット型音声ガイド」は、片手を塞ぐことになる音声ガイドや、耳を塞ぐことになるイヤホン型ガイドの弱点を克服した。内容の変更・更新はコンパクトフラッシュの交換によって可能であり、外国語対応も用意している。また、「触察ピクト」は、トイレやロッカー、古墳などに3センチ幅の立体サインを取り付け、十数個程度を組み合わせることで、どの方向に何があるのかという空間案内を行っている。これは、健常者や外国人にとっても有効だが、一方で数が多いために視覚障害者には認識が難しいという指摘もあったことから、音声と点字による解説を付加したという。いずれにせよ、試作と検証を繰り返し、評価を重ねながら実施に至っている。

このほか寺社でも、三十三間堂や愛宕念仏寺などでは触ることのできる仏像が用意されており、龍安寺でも石庭のミニチュアに触ることができる。

ただし、日本博物館協会が2004年度に実施した博物館における障害者対応に関するアンケート調査によれば、視覚以外の方法で観察・鑑賞できる展示物について、「ある」と回答した館は873館中382館(43.8%)、「ない」と回答した館が484館(55.4%)という状況に過ぎない。「ある」と回答した内容については、「手で触る」が295館、「体験する」が103館であるが、その質についてはこの調査では明らかになっていない。

なお、視覚障害者のための専門ミュージアムはいずれも私設だが、1984年にオープンした「ギャラリーTOM」(東京都渋谷区)がその嚆矢である。ギャラリーTOMは、村山亜土・治江夫妻が、視覚障害者であった長男の「ぼくたち盲人もロダンを見る権利がある」という言葉に触発され開設した美術館で、心ある人々の支援によって活発に特別展や講演会等を実施している。また、桜井政太郎氏が自らのコレクションを自宅に展示している「桜井博物館」(岩手県盛岡市)等があるが、視覚障害者が実際に彫刻作品や剥製、考古物等に触ることによって得るものは大きい。

視覚障害者対応以外では、例えば、兵庫県立人と自然の博物館において、発達障害、色覚障害、コンピュータを扱えない子どもたち等に対応した博物館テキストを作成している。また、新潟県立歴史博物館では、色覚バリアフリーのための展示に取り組んでいる。色覚障害者は赤や緑色の区別がつきにくく、我が国に3百万人以上いると推定されており、同館ではパネルを色ではなくシンボルの形状を変えるなどの工夫をしている。同様の取組は「御食国若狭おばま食文化館」等でも行われており、印刷物等の作成に当たって「カラーユニバーサルデザイン」や「色覚バリアフリーデザイン」に配慮しようという自治体も増え始めている。

さらに、単なる障害者サービスという枠を超えて、触覚などの五感に着目するユニバーサルな(だれもが楽しめる)展示を模索する館も増えている。例えば、大阪の吹田市立博物館では2006年より「さわる 五感の挑戦」という企画展が毎年開催されている。また国立民族学博物館や京都大学総合博物館でも視覚障害者対応という視点にとどまらず、「さわる」ことをテーマとしたワークショップやイベントが継続的に行なわれている。

動物園や水族館でも障害者プログラムを用意している例は多い。例えば、大阪市天王寺動物園では、知的障害者を対象とするウサギやヒヨコなどのタッチングや、視覚障害者を対象とする動物の実物大のブロンズ像に触れたり乾燥した糞を触って感触を確認するなどのプログラムを用意している。また、マリンワールド海の中道(海の中道海洋生態科学館)では、障害者を対象とした「イルカふれ愛教室」を実施している。よこはま動物園ズーラシアでは、2005年10月、世界的なプロジェクトである「ドリームナイト・アット・ザ・ズー(Dreamnight at the zoo)」をアジアで初めて開催した。これは1996年にオランダのロッテルダム動物園が始めた障害のある子どもたちとその家族を動物園に招待し、気兼ねなく楽しいひと時を過ごしてもらおうというプロジェクトで、2008年5月現在、世界32か国から161園館が参加しており、我が国からは5園が参加するようになった。

最近、映画館や劇場でも視覚障害者向けのオーディオ・ガイドや聴覚障害者向けの字幕サービス等を用意したり、バリアフリー対応をしている施設が増加傾向にある。また、電動で座席の高さを立っている人と同じ目の高さになるまで変えられる車イスが開発されており、「車イスから見やすい高さに作品を展示してほしい」という以前からある要望にこたえられるようになった。既に東京都美術館や世田谷美術館等には備え付けてあるが、台数に限りがあり、さらに普及することが望まれる。